



学校通信

平成30年度 第8号
平成30年11月30日
練馬区立開進第三小学校
校長 岡部 良美

『思いやりの心』と『やる気』をはぐくむ

校長 岡部 良美

私は、子供に「思いやりの心」と「やる気」を育てていくことによって、立派な大人に成長していくと信じています。

次の詩は、私が担任をしていた頃の5年生のものです。

久しぶりに お母さんに かみの毛を洗ってもらった
その手はあたたかかった
いつもひとりのおふろ おふろの時は 歌を歌わないと さびしくてたまらなかった
いつも弟や妹のお母さん お母さんの手で洗ってもらった
洗ってもらっているうちに 寝てしまいそうになった
今日は わたしだけのお母さん それも今だけ

日頃から「あなたはお姉さんなんだから」とまわりから言われ、「わたしはお姉さんなんだから」と我慢していたこの子にとって、久しぶりにお母さんと一緒に入れるお風呂。どんなに新鮮な喜びに浸ることができたのでしょうか。「寝てしまいそう」になるほど母の手の温かさを、心のぬくもりとして泌みるように感じ取ったのです。「自分の気持ちが分かってもらえた」と実感できた子供は、他の人の気持ちが分かる「思いやり」のある子供に成長していくにちがいありません。

相手の気持ちを察するというやさしい気持ち、思いやりの心は、自分の気持ちを分かってもらえたという実体験を通してはぐくまれていきます。思いやりの心は、他の人の心を察しとることから膨らんでいきます。他の人の苦しみ、つらさ、痛みを自分のこととして感じ取れる感性豊かな大人に成長していきます。家族や友達はもちろん、お年寄りや身体の不自由な人などへと、思いやりの心が広がっていきます。

こんな会話は無いでしょうか。学校から帰宅したばかりの親子の会話です。

親「見せなさい。昨日やった算数のテスト返してもらっているんでしょ？」 子「・・・(親に渡す)」
親「90点か。惜しかったね。ところで、Aさんは？」 子「知らないよ」
親「また負けたの。何点負けたの？」 子「10点負けただけだよ」
親「10点！それじゃAさんは100点なのね。すごいわ。あなたも頑張りなさい」 子「わかっているよ」

気になりますね。最も信頼している親の言葉だけに問題です。「あの子より成績がよい、わるい」という考え方で親が子に接していると親子関係に温かさがなくなります。さらに、見下して優越感をもったり、逆に劣等感を抱いたりするような心のゆがんだ子供になりかねません。

現実はそのように甘くないと言う方もいるかもしれませんが本当なのです。子供はだれでもみな、本来は素直で、「やる気」をもっているのです。しかし、大人の一言や無神経な言葉の繰り返し、子供のいざというときの「やる気」をなくすことにつながっていくのです。子供の成長は、赤ちゃんの頃のようによく見えません。見えにくくなってきていますが、日々成長しているのです。小さな努力やささやかな進歩を認め、評価していくことが大切です。

自分を高めるための「やる気」と、他の人にやさしい「思いやりの心」は、車の両輪のようなもので「自立」と「共生」につながります。自己肯定感をもつとともに、人権の尊重につながります。

明日の音楽会で、子供一人ひとりが合唱、合奏に、どんな「やる気」と「思いやりの心」を發揮するでしょうか。ぜひ、大人として「思いやりの心」で子供の「やる気」を認めていきましょう。子供は大人の背に学びます。